

科学的医療から統合医療へ |

板橋中央総合病院血液浄化療法センター

阿岸鉄三

現在われわれが行い、あるいは受けている医療は、近代科学に依拠していると通常考えられている。この科学的医療は、米国においては20世紀初めに議会闘争を通じて正統性を獲得し、わが国では明治政府がドイツ医学を導入したことに始まったものである。科学的医療は、20世紀末に臓器移植・人工臓器・遺伝子治療・再生医療などに例を見るように大いに発達したが、世界的に見て普及は極度に偏在しており、その恩恵をうける人口は極めて少ない。見方によっては医学的問題から経済的・倫理的・宗教的・哲学的問題などへの trade-off の結果がもたらされただけであるといえる。一方で、奇妙なことに、同じような時期に補完・代替・伝統医療などと呼ばれる医療への復古的関心が、医療先進国と考えられる欧米において高まりをみせてきている。さ

らに最近では、補完・代替・伝統医療などと科学的医療を包括した概念である統合医療 integrative medicine の実践へ関心が向けられている。考えてみれば、欧米においては1970年代ころから医療の質的評価としてQOLなどが問題になってきた。医療の質は、著しく個人的感性にかかわるものであり、いまだ科学的思考とは整合せず、科学的評価も不可能な問題である。とすれば、われわれはすでにこの時代に科学的医療から統合医療へのパラダイムに突入していたと指摘することができる。医療は、人類発生の時期から根源的に統合的であった。しかし、西欧ルネサンス時代を経て科学的思考、すなわち目に見え、数字で表されるもののみを科学的と考え医療にもその考えを適用してきた。しかしその不備に気が付いて原初的医療に戻ろうとするのが統合医療へのインセンティブであると考えられる。